～豊かな心と確かな力　瞳輝く寒川の子～

寒川町立寒川東中学校

研究テーマ：　「資質・能力を育む授業づくり」～タブレットの効果的な活用～

１、実践の目的

令和元年１２月に文部科学省から「GIGAスクール構想」が打ち出された。その後のコロナ禍の影響もあり、令和２年度末までに全国的に１人１台端末、高速大容量の通信設備の整備がなされた。昨年度から２年計画でタブレットの活用をテーマとした研究に取り組み、全教職員がタブレットを授業のツールとして使用できるレベルを目指している。

昨年度は、各教職員が試行錯誤しながらタブレットの活用を試み、実践を積んだ。

今年度は、各学習場面においてタブレットを活用する有効性やメリットをより明確にしたい。そして、どのような場面で活用するのが効果的であるかを研究し、単元目標（本時目標）を達成するために、効果的に実践していきたい。

２、実践の内容

（１）学校経営方針との関連

①授業を核とした指導力の向上

・生徒に身につけるべき力を習得させるための適切な指導力の向上を図る。

・教師の説明と理解確認を精選し、生徒を理解深化に導くための授業づくりの工夫を行う。

・タブレットの効果的な活用についての研究を行う。

②確かな力を育てるために

・ICT 機器（タブレット）の効果的な活用を行う。

・本時の目標に迫るためのアプローチの方法を整理する。

・タブレット端末により何が出来るのかを明確にする。

・本時の目標及び、生徒の学習意欲を引き出すための一手段としてタブレット端末を効果的に活用する。

（２）大切にしたいスタンス・考え方

①千里の道も一歩から（最初は誰でも初心者）

②支持的風土（どのようなレベルの実践でも認め合える雰囲気）

③全職員の研究への参加

なお、本研究の第一の目的は「より良い授業」を構築するために「タブレットというツールをどのように活用できるか」にある。タブレットの活用を優先するあまり、授業の流れに無理が生じたり、学習目標があいまいになることは本末転倒である。研究にあたってはその点を十分に踏まえ、取り組んでいく必要がある。

（３）研究内容

①定期的にアンケートを実施し、活用状況の共有とその推進を図る。（活用頻度、使用した時間、使用したアプリ及び目的や場面等）

②講演会を実施し、タブレットの活用についての見識を深める。

③研究授業を実施し、タブレットの活用方法について学び合う。
④生徒アンケートを実施し、タブレット等の効果を把握する。

３、実践の成果

（１）１学期、夏の講演会を踏まえたまとめ
・授業において、さまざまなアプリを使った授業展開があるが、大切なのはそれを用いる目的である。何のためにこの場でそのアプリを使ったのかをはっきりとさせることが非常に重要である。
・アンケートの結果を見ると「課題の提示」でタブレットを使っていることが多いが、「課題の提示」だけで生徒の資質・能力を育むことは難しい。個別学習や共同学習でどのような学習をさせると資質・能力を育むことができるのかを研究することが今後重要になってくる。
・現在活用中のアプリは、活用範囲が広いので実践例の一つとして取り入れたい。問題の配付、テスト、自動採点、提出の確認などが一括してできたり、やり取りの共有や書き込みもできたりするので、今後、ロイロノートと同様に効果的な活用していけるとよい。
・英語以外に他教科についても、デジタル教科書が導入された場合、授業のスタイルを変える必要が出てくる。
・無料で使えるアプリはどんどん活用できるようにしたい。生徒に応じた学びに対応しやすくなる。導入に関しては行政とも連携を図る必要がある。
（２）２学期、冬の研究会を踏まえたまとめ
・授業を作っていく上で、他教科の授業は非常に参考になる。研究授業を見て、自分の教科に置き換えて、目的を達成する為の一ツールとしてのタブレットを効果的に活用した授業を考えていくことが大切である。
・生徒が身につける思考スキルによって有効な思考ツールを選択・使用することで、教科の学びをより確実なものにし、さらには情報活用能力の育成を図ることもできる。
・指導案において、生徒の学習問題・学習課題は、「～しよう」「～させる」ではなく、「～だろうか？」などの疑問形で表すことで、授業中の発問ともリンクさせることができる。
・資質・能力を育むためにも協働学習は非常に重要である。（コラボノートの紹介）
・話し合いが苦手な生徒がいるが、必ず将来困るので、そのような生徒に目を向けていかなければならない。タブレット上のみのやり取りにならないよう注意が必要である。
・シンキングツールは思考を整理する為に大変便利なので、各教科で活用するとよい。

４、今後の展開

今年度の研究により、授業におけるタブレットの活用に一定の進展が確認された。また、それらを用いた授業が生徒にとって効果的であることも明確になった。当初は、「タブレットの活用について即効性がある利用方法」を求める傾向もあったが、現在は「各教科や各場面においてどのような使い方が最も効果的か」という姿勢で研究を続けていくことが重要であると考えている。さらに、次年度から始まる予定のタブレットの持ち帰りについて、１月に試験的に実施した。持ち帰り時の課題の提示の方法や内容、管理面やモラルについても次年度の研究の対象となり得る。今後も、より良い授業の構築に向けて、タブレットの活用について研究を続けていきたい。